

# 上映映画解説

1954, 7

国立近代美術館 フィルムライブラリー



NO. 24

## 月例映寫会について

国立近代美術館では、フィルム・ライブラリーで内外古今の優秀映画の収集保存とその活用を努力いたしております。今回は「黒田清輝展」の期間中、月例映寫会として、次の新作短篇映画三本を、月・水曜日を除く毎日二時、四時の二回上映いたします。

## 新風土記——北陸—— 三巻

昭和二十八年度文部大臣賞受賞

岩波映画製作所作品

製作 小口禎三  
演出 竹内信次  
高林武次  
柳沢寿男  
脚本 岩佐氏寿  
編集 柳沢寿男

北陸地方は、多雪な特有の風土をもち、加賀の前田、越前の松平両氏のもとに、古い歴史に培かれた数多くの名産と由緒ふかい風習を現代に伝えていきます。九谷焼、輪島の漆器、高岡の銅器、有名な富山の売薬、それに金沢城、兼六園にしのばれる加賀百万石の栄華の跡など、現在に遺された古い時代の名ごりをこの映画は先ず紹介しています。

この地方の年来の悩みは、猛威をふるう冬の雪と、春の雪だけの水でした。しかし時代の遷り変りは、伝統の根深いこの地方にも漸く大きな変化をもたらしました。それは従来災害の原因であった雪と水が、新しいエネルギー——電力の源として利用され始めたことでした。多くの発電所の建設は、やがて手工業の盛んだつたこの土地にもめざましい近代工業の勃興を促しました。

この映画は、北陸地方（富山、福井、石川の三県）の産業の、対決する古いものと新しいものの姿を文化的に描こうとした産業風土記で、五三年度からキネマ旬報社で行った短篇映画のベスト5に入賞した作品です。

## 画家グラント・ウッド

Grant Wood

U S I S 映画

この映画は、アメリカの著名な画家グラント・ウッドについて、その主要な作品を通して特異な作風と人柄を紹介しています。

グラント・ウッドは、トーマス・ベントン、ジョン・スチュアート・カリーらとともに、写実主義的な「リジョナリズム（地方主義）」と呼ばれる一派の代表的画家として、一九三〇年代に非常な人気を博しました。彼は一八九二年アイオワ州に生れ、苦学しながら画の勉強をし、第一次世界大戦後一時バリのアカデミー・ジュリアンに入りましたが、幻滅を感じて故郷アメリカ中西部に帰り、一九四二年歿するまで終生、故郷の土地で制作を続けました。

彼は、芸術家は異国趣味を求めることなく、自分が知っている世界を描くべきだ——という強い芸術的信念の下に、丹念な細密描写をしています。寡作な画家として知られていますが代表作「植木鉢をもてる女」「アメリカンゴシック」「石の町」「農民の会食」などがこの映画で紹介されています。（一六ミリ）

## 奥三河の花祭

岩波映画製作所作品

企画 愛知県北設楽郡町村会事務局  
製作 小口禎三  
演出 西尾善介  
脚本 岩佐氏寿  
撮影 杉本正二郎

全国各地で催される祭礼は幼い日の思い出として、又郷土色豊かな風習として私たちの心をたのしませて

くれますが、同時に数多くの民族的な文化遺産を現代に伝えていきます。

ここにとり上げられている三河の花祭は、お祭のひとりの形式として、また民族的な舞踊の遺産として、早くから民俗学者の注目をあつてきましたが、交通の不便な山間の地だけに、一般の人々の目にはなかなかふれる機会がありませんでした。この映画はこのような花祭を、記録的に描いたものです。

天竜川をすつとさかのぼった、山深い、大入川、振早川の溪谷に沿った地帯に、神楽の一種といわれるこの花祭は、数百年に亘つて伝えられているのです。花祭の部落は二十数か所ありますが、舞の形には大体二つの流れがあり、大入系・振早系と呼ばれています。米作には適しないこの地方で、花祭は新しい年の豊かなみりをねがう、山村の農民のお祭です。

祭は夕方、ゆるやかなテンポの、ひなびた「ベチの舞」に始まり、元来は巫女の舞でしたが今は青年たちの舞う「市の舞」、更に「地面めの舞」、美しい衣裳をつけ花冠をもつた、学齢期の子供たちの「花の舞」、それより年上の少年たちの調子のよい「三ツ舞」と進みます。やがて、一貫目もある大きな面をつけた山見鬼、神鬼などがまさかりをもつて舞いますが、一種ユーモラスで農民的な感じがします。少年たちが一人前の村人になる試練の舞といわれる「四つの舞」は、最も難しいものとされていますが、全身の軽快な踊りの早いテンポにさそわれて、見ている村人たちも一緒に踊り始め、大変なにぎやかさとなり、おわりの「湯はやし」に至つて、花祭は最高潮に達します。湯煙の中に場内騒然となつた花祭は、やがて朝鬼の出となり「シズメの舞」になるまで夜を徹して行われます。